



# かがや

2018年5月1日発行  
公益財団法人 大川美術館  
〒376-0043 桐生市小曾根町3-69



難波田龍起《アクロポリスの空》1938年（寄託作品）

## ことば 117

「私はその頃、ずっと化石のようなものに執着していました。—この『アクロポリスの丘(空)』が、この頃の作品で一番愛着を感じているものです。化石—つまり、表情を抹殺した端正な死のようなもの、それに魅せられながら、それに対して何かもやもやした自分のなかのものがあって、その二つが猛烈に争っていたのです。」

## 【勉強会】

### 「大川美術館所蔵『清水登之日記』を読む」 メンバーによるリレーエッセイについて

当館には、清水登之の明治四十年から大正五年までの『畧誌』一冊と、大正六年から昭和十九年まで(昭和三年は欠)の日記全二十八冊が収蔵されています。

平成二十五年八月、長年にわたり、清水登之の研究を続けてこられた栃木県立美術館、杉村浩哉氏を中心に、福沢一郎記念館・伊藤佳之氏が世話人となり勉強会「大川美術館所蔵『清水登之日記』を読む」は、はじまりました。

この研究会は、当初より、日記の翻刻を出版することを目的とするものではなく、当面は「日記」を詳しく読み込み、清水登之の画業を出来得るかぎり詳細に検討するとともに、当時の画家どうしの交流、その時代、社会と美術家の関わりについても考察を深めることを目的としました。現在、研究会のメンバーはつぎのとおりです。(敬称略、括弧内は所属)

杉村 浩哉(栃木県立美術館学芸課長)

伊藤 佳之(福沢一郎記念館学芸員)

河野 エリ(とちぎ蔵の街美術館学芸員)

春原 史寛(群馬大学教育学部准教授)

山田 隆行(千葉県立美術館研究員)

忠 あゆみ(アーツ前橋学芸員)

佐原しおり(群馬県立館林美術館学芸員)

小此木美代子(大川美術館学芸員)

研究会は、三ヶ月に一度のペースで、当館に集まっていただき、日記の書き起こし、データ化、注釈をつけるべき項目をあげ、注釈の執筆また、専門分野からの資料を持ち寄るなどして読み進め、それらのデータを丹念に積み上げてまいりました。

この勉強会の発足から5年が経過しようとしています。日記を収蔵する当館として、これまでの成果、中間報告の場として、この『ガス燈』の紙面にて、研究会の主要メンバーによるリレーエッセイをはじめすることにしました。それぞれの方々の現在の視点から、清水登之とその日記に関連したエッセイをご執筆いただきます。

(小此木)

## 清水登之日記と大川さん

杉村浩哉

清水登之の日記の閲覧をお願いするために大川美術館を訪ねたのは1996(平成8)年の春だった。その年の秋に栃木県立美術館で清水登之の回顧展が開催されることになっており、その準備のためであった。

栃木県立美術館では清水登之を栃木県ゆかりの美術作家の中でも最も重要な存在と位置づけてきた。1972(昭和47)年11月の開館記念展は「栃木県の美術」という総論的な内容だったが、開館記念展に続く最初の県関係作家の回顧展として1973年の2月から3月にかけて清水登之展を開催している。

戦後しばらくの間忘れられかけていた清水登之の画業であったが、1970年に日動画廊渋谷東急店で開催された「歿後25周年 清水登之展」、1973年の栃木県美での回顧展、さらには1975年に日動出版から出た「清水登之画集」などによってその魅力が再認識されている。本格的な研究や各地の美術館での作品収蔵も始まり、1982年に東京、京都の国立近代美術館で開催された企画展「アメリカに学んだ日本の画家たち 国吉・清水・石垣・野田とアメリカン・シーン絵画」のように、日本の近代美術をフランス美術ではなくアメリカ美術との関係から考察するという方向も打ち出されていった。

1996年から97年にかけて栃木県美で開催された「清水登之展」は、1973年の回顧展から20年が過ぎ、そろそろ2回目の本格的回顧展を開催すべきではないかという館内外の声を反映してのもので



1996年  
栃木県立美術館  
清水登之展のちらし

あった。担当は油彩画を研究分野としている私が指名されることとなった。

1985年に栃木県美に奉職した私は、当時学芸員生活も10年目、1992年に開催した開館20周年記念展の大事業も無事終え、一応は自分で動けるような気になっていた。とはいえ、それまで担当してきた企画展は西洋美術とりわけイギリス関係のものが多く、本格的に日本近代美術に取り組むのはこれが初めてであった。また、1998年4月に栃木県美立ち上がりで全国5館を巡回するブリティッシュ・カウンシルとの現代イギリス美術展の仕事も始まっていた。同時にいくつかの企画展を準備することはあるが、YBA（ヤング・ブリティッシュ・アーティスト）と清水登之ではあまりに振幅が大きすぎるのではないかと、この私に本当にできるのか、という内心の不安と共に準備に入っていた。先輩学芸員たちからは「学芸員というのは学校で何を勉強したかではなくて、仕事をする中で専門家になっていくのだ」という励ましとも無理強いともとれるような言葉が降りてきた。今では私自身そう思っているのであるが。

さて、栃木県美での2回目の回顧展で私が目標としていたのはスタンダードな清水登之像の提示であった。各地の美術館はその研究や紹介を「お家芸」とするような作家を抱えている。群馬県であれば湯浅一郎や福沢一郎、山口薫。茨城県では横山大観や中村彝といった県を代表する存在である。清水登之を栃木県にとってのそうした存在としてくっきりと示したいという目標があった。また、個々の作品に関する情報を盛り込み、画家の人間像と芸術をわかりやすく伝える評伝を掲載した図録の制作も目指していた。

そこで日記である。登之の日記については1924年の1年間のみ1991年に武蔵野市が活字化している。またパリ滞在期を中心にした数年間については、1970年代初頭のコピーと思われるものが栃木県美に保管されていた。しかし、登之の生活と制作の全貌を知るためにはやはり大川美術館に閲覧をお願いしなくてはならない。

本稿の冒頭で大川館長にお願いに伺ったのは1996年春と書いた。展覧会開催まで10か月を切っている。資料調査としてはずいぶんと遅い時期である。なぜそこまで遅くなってしまったかという、大川栄二館長が怖かったのである。

大川美術館が開館したのは1989年。70年代から80年代にかけて数多く設立された日本の美術館の中でもとりわけ強い個性を放っていた。大川さんというコレクターの心の中が見えるようなコレクションは言うまでもないが、大川館長自身の個性が並外れていた。当時、私自身はまだ直接お話ししたことはなかったが、大川さんと面談したことのある先輩学芸員たちの話などを耳にするにつけ、できれば私はこの御仁とは関わることなく平穩無事な学芸員生活を送りたいものだ、などと思っていたのである。

恐る恐るのお願いに上がった私に対して、大川さんはやはり厳しかった。人の金で作品を買い、本を読んで勉強しているようなあんたら学芸員に本当のことなどわかるものか、と言うのである。大川さんからすれば、人間の器も人生経験もまったく比較にならない若造など相手にもならないのだろう。それにしても3時間ほどもお相手をして下さり、私はヘビー級ボクサーにコーナーに追い詰められて連打を受けたフライ級見習いのように帰途についたのだった。

お願いに上がる時点で、日記のコピーは遠慮してほしいというは何っていた。閲覧し、メモを取るのにはよろしいという。そうか、それなら全部読んでやろうじゃないか。とにかく通いつめて読み切つてやろうじゃないか。本来的に怠惰で意志薄弱な私であるが、大川さんの連続パンチを受けて頭がどうかしたのか、ふらふらになりながらも、逆襲の拳を固めつつ桐生駅への坂道を下ったのであった。

4月から大川美術館通いが始まった。あれほど



日記調査に使用したノート

厳しいことをおっしゃった大川さんだったが、閲覧には快適な部屋を用意して下さい、そしてありがたいことに完全にほっておいてくれた。朝、開

館と共に入り、その都度小此木さんが用意してくださる日記を広げる。昼食は駅前で買ったサンドイッチと野菜ジュース。お手洗いをお借りする以外は部屋にこもって閉館までひたすら読み、メモを取っていった。

近代日本美術研究の素養のない人間であるから、まず文字を読むことが難しい。はじめのうちは呆然と字面を追い、読める文字だけ拾っていったのだが、それを続けているうちにしだいに癖のある文字が読めてくる。耳で聞いた英語をそのままカタカナに移している独特な表記にも慣れてくる。

日記には清水登之の人間がそのままに記されていた。当時辺境の地であったシアトルでの焦り、ニューヨークに出て画家としての自己を確立し、家族を慈しんだ日々。パリでの豊かな体験。昭和の日本に帰国してからの苦闘、そして戦争。1937年12月の南京、難民の居住区で中国人の老人に親切にしたら夕食に招かれた、などという逸話もあった。

ひと通り読み終えたのは7月末。メモは大学ノート5冊になり、不思議なことにその頃には大川さんとも率直に話をするができるようになっていた。相手にもならないフライ級でも、出てくるパンチは一応は受けてやろうという気になったのかもしれない。

ひたすら日記を読んだ日々、私はたいへん多くのものを学んだ。あの時間を通じて、私は清水登之という人物に近づくことができ、学芸員が作家にどうアプローチすべきかという姿勢を学んだように思う。30年以上も学芸員として働いてきて、忘れられない仕事はいくつかあるが、その中でも人生の宝のように思っているのが、1996年の春から夏にかけて、大川美術館の一室にこもってひたすら登之の日記を読んだ時間だ。

その年の清水登之展では大川美術館からも何点かの作品をお借りすることになった。お願いする作品のリストを示した時、大川さんは「君はなぜ《育夫像》を借りんのだ。あれは登之の絶筆だぞ。」といくぶんかの憤りを込めて私に尋ねた。しかし、私が「大川さん、あれは絵なんてもっと別のもの、位牌のようなものじゃないかと思っ。他人が見てどう言うようなものではないんじゃないでしょうか。だから他の作品と並

べることはできないと思うんです。」と言うと、意外にも大川さんは「そうか」とすぐに引き下がった。自身特攻隊の生き残りだったという大川さんにとって、《育夫像》の大切さと共に、他の作品とは異なる特殊性も実感しておられたのだろう。

あの展覧会から22年が過ぎた。この春、栃木県立美術館では「国吉康雄と清水登之 ふたつの道」という展覧会を開催する。世界的な国吉康雄コレクションで知られる福武財団と岡山大学大学院国吉記念講座のご理解とご協力をいただき、二人の画家の生涯と画業を対比する企画である。

その展覧会に大川美術館が所蔵する4点の育夫像をお借りできることになった。4点そろって展示されるのは大川美術館以外では初めてのことはないか。《育夫像》についての私の考えもあのころとは少し変化した。かつての私は、絵画は画家の感性から出発し、技術を理性がコントロールしながら生まれてくるもの、などとわかりやすく考えていた。もちろんそうした知的な制作もあるだろう。しかし、多くの芸術家とその作品に接していくうちに、そうではないもっと混沌としたものの、簡単にはわからないもの、しかしそれゆえにこそ人間という存在を深いところから描き出すものがあると思うようになった。誰に見せるためでもなく、ただ自らの愛する者を再びそこにあらしめようとした《育夫像》は、美術という枠を超えた特別な存在なのだと思う。

栃木県美の会場には大川さんも天国から見に来てくれるのではないだろうか。また叱られそうな気もするが、お叱りはなるべく短時間で済ませてもらいたいと思っている。

(栃木県立美術館 学芸課長)



2018年4月28日～  
国吉康雄と清水登之  
ふたつの道展 ポスター



## 【研究ノート】萬鉄五郎「風景」 —「角ヨロヅ」の作品をめぐる

萬鉄五郎(1885-1927)の油彩画「風景」(油彩・キャンバス、33.2×45.3センチ)は、桐生で新発見の萬鉄五郎作品です。(現在、当館に寄託されています。)昨年八月のこと、桐生市内の方から美術館に連絡があり、所蔵する萬鉄五郎の作品を観てほしいとのことでした。持参された作品を見て、これは萬鉄五郎の真作だとおもいました。色彩と筆づかい、何よりも松や点景の人物など、その飄逸な表現はこの画家ならではのものと感じました。画面の右下には、漢字の上に角が二本生えたような形の「角ヨロヅ」と称された独特のサインがあり、1926年の年記もありました。裏には、萬自身の字で「風景 萬鉄五郎作」と題されていました。またキャンバスの木枠(左側側面)には、二つの小さなシールが貼られていました。ひとつには、「鐵人会 第九五號」、もうひとつには、「金百五十圓也」(シール右側は、滲んで判読できず)と印字されていました。(挿図1-3)以上が、作品の現状から得られる情報です。

さて画面の年記から、制作年を1926年とすると、この時期、萬は神奈川県茅ヶ崎市に住んでいました。東京での生活のなかで、体調をくずし、転地療養ということで転居したのです。それまでの「前衛」と称されるような時代の先端をつっぱしる鋭角的な表現から、当時半農半漁のこの地で、南画に親しみ、次第にこの作品に見られるように明るさと余裕をとりもどしたのです。画面をみると、農家の庭先でしょうか、農夫が後ろ手をして畑地のなかを歩いています。その姿は、麦踏みでもしているようです。麦踏みならば、季節は早春ということになります。緑の色も、春から夏というには、すこし鮮やかではありません。しかし、どうみても、ゆったりと、のびのびとしていながら勘所をおさえている萬鉄五郎らしさがみられるいい作品だとおもいます。

しかし「明るさと余裕」は、作品の表面からうかがわれることにすぎません。画家の心中は、穏やかなものではなかったというのが実情でしょう。なぜなら前年末から萬の長女登美が健康を害して病床にあり、萬は娘の容態を気かけながら、父として家族を支えていかなければならなかった



挿図1 萬鉄五郎《風景》全図



挿図2 萬鉄五郎《風景》のサイン



挿図3 萬鉄五郎《風景》の裏面

からです。そうした心痛は、萬の芸術のよき理解者であり、パトロンでもあった野島康三(1889-1964)への援助を願うつぎのような書簡の一節からもうかがわれます。

「此の春子供が蒙病の際は大変御世話になりました誠にありがたく存じました。御陰様で一時よい方に向かいましたけれども九月頃から又悪く、ずっと床に就いたきりですが昨今では非常に衰弱致し重態を続けて居ります。費用も非常にかかりますので今年は随分働きましたが先月と今月は殆ど収入がありませんので誠に困って居ります。」(野島康三宛書簡、1926年12月7日付、『鉄人画論』(増補改訂)、中央公論美術出版、1985年、p.340)

ここで萬は、「今年は随分働いた」と書いていますが、画家が「働く」といえば、絵を描くことになるでしょう。描いて、描いて作品を売ることが、働くことであり、家族を養うことになります。その点から、もう一つのヒントになるのは、木枠に貼られたシールです。「鐵人会 第九五號」とは、どのような意味でしょうか。萬の「年譜」によれば、1922年7月に「萬鐵人日本画展覧会」を開催(小石川竹早町、野島康三宅)し、「このとき画会『鐵人会』をおこす」とあります。(注1)この画会は、作品を頒布する目的で、後援者を募ったようです。その「鐵人会」が、26年当時もつづいていたのでしょうか。また、「第九五號」とは、95点も頒布のための作品を描いていたということでしょうか。しかも、その価格が、「金百五十圓也」と理解していいのでしょうか。というように、いくつかの疑問がうかんできます。ただ画家の生活というものは、画家自身が日記でも残していないかぎり、明らかになるものではありませんし、また、重要なのは創作ですから、生活の面はその背景としての意味があるにすぎません。とはいえ、萬鉄五郎という画家の生涯をふりかえるときに、そうした生活の面から検証は必要でしょう。

そこで、まずこの作品と同じ「角ヨロヅ」のサインと「1926」という年記をもつ作品を探してみることになりました。公立美術館の所蔵作品では、岩手県花巻市の萬鉄五郎記念美術館に2点、神奈川県茅ヶ崎市美術館に1点、愛知県美術館に2点がありました。さらに個人蔵で、過去の展覧会カタログによれば3点みとめられました。(注2)いずれもこの「風景」とほぼ同じサイズ(6号)でした。ただ、同じ「角ヨロヅ」サインでも、表現が微妙にことなっているようです。



挿図4 萬鉄五郎《水郷風景》油彩・カンヴァス  
33.3×45.5cm 愛知県美術館所蔵



挿図5 萬鉄五郎《紅葉風景》油彩・カンヴァス  
33.4×45.5cm 萬鉄五郎記念美術館所蔵

愛知県美術館の2点は、キャンバスにグレーの絵具を塗った下地の上に描かれています。(挿図4)

また、萬鉄五郎記念美術館の2点は、いずれも点描とはいえませんが、短い筆致をかさねるように描いています。(挿図5)茅ヶ崎市美術館の作品は、水彩画のようにあっさり描いています。(挿図6)同じ年の制作であっても、どうも時期、あるいは季節によって変化しているようです。



挿図6 萬鉄五郎《海岸風景》油彩・カンヴァス  
茅ヶ崎市美術館所蔵

また、「風景」の作品の裏に貼られたもう一枚のシールにあった「金百五十圓也」という金額をどのように理解すればいいのでしょうか。すなわちみれば、文字通りこの作品の価格ととればいいでしょう。同年2月の第4回春陽会に萬は会員として5点出品しています。そのなかの一点である「湘南風景」(出品時の題名「風景」、50×60.5センチ、東京国立近代美術館)は、価格を「七〇〇」円としていました。(注3)したがって、頒布を目的とした「風景」を「金百五十圓也」としているのは、買いやすいのではという萬の気持ちのあらわれだったのでしょうか。もっともこの当時(1925年)、米価がはじめて一升一円を超

えたということがニュースになっていたのですから、誰もが買えるものではなかったのも事実です。そして、引用した野島宛の書簡の最後に、萬は「どうか又式百円程御貸し願われませんか。」と嘆願していました。作品が売れていれば、このようなことを願う必要もないのですから、当時は描けども、売れなかったというのが実情だったのでしょうか。

はじめに「風景」の表現は飄逸だと書きました。筆をはしらすことで、画家は懸命に「働いて」いたのです。愛娘の容態を気づかいつつ、絵筆をもつ父の胸中はどのようなものであったでしょう。しかし愛娘登美は、看病のかいなく、この年の12月16日に結核のために亡くなっています(享年16)。萬は、とても落胆したと伝えられています、その翌年(1927年)5月1日に、やはり結核のために萬自身も亡くなっています(享年41)。

#### 注記

(注1) 鐵人会については、佐々木一成編「年譜」(『萬鐵五郎展』カタログ、東京国立近代美術館他、1997年、p.211所収)、ならびに「萬事典」(『没後90年 萬鐵五郎展』、岩手県立美術館他、2017年、p.320所収)を参照。

(注2) 『萬鐵五郎展』カタログ(東京国立近代美術館他、1997年)によれば、下記のように個人蔵の作品3点が掲載されている。

no.205「海辺」、p.170(所蔵は株式会社中村屋と記されている。)

no.230「静物」、p.187

no.231「湘南風景」、p.189

(注3) 東京文化財研究所編『大正期美術展覧会出品目録』、p.431

## 展覧会のお知らせ

コレクションによるテーマ展示

# 庭をながめれば

4月10日(火)～6月17日(日)

近現代の日本の画家たちが描いた「風景」の数々を「庭」という視点から選んでみました。

大川美術館の「庭」が新緑に包まれるこの季節に「庭」をまぢかに感じながら、多種多様な「庭」のながめをお楽しみいただけたらと思います。

#### 主な出品作品

間部時雄 《鶏の遊ぶ農家》

1905年頃 水彩・紙

萬鐵五郎 《土沢風景》

1915年頃 油彩・カンヴァス

高山辰雄 《爽映》

1965年頃 紙本彩色

川口軌外 《息子・京村のいる風景》

1927年頃 油彩・カンヴァス  
他



川口軌外《息子・京村のいる風景》1927年頃

#### ◆ 関連事業

・「ボタニカルアート入門」

講師：下田佳代子(植物画家)

日時：5月19日(土) 14時～15時30分

会場：大川美術館 レクチャー室

・「ミニコンサート」

ヴァイオリン：菊地 理恵

日時：6月16日(土) 12時～12時50分

会場：大川美術館 レクチャー室

※ いずれも事前のお申し込みが必要です。

入館料のみでご参加いただけます。



## 平成30年度展覧会のお知らせ

**模写展** —ヨーロッパ古典絵画の輝きを解きあかす  
7月3日(火)～9月24日(月・祝)



木島隆康  
フラ・アンジェリコ作《リナイ  
ウォーリ祭壇画》1443年  
技法：金地テンペラ(板/麻布/  
石膏地/金箔/卵黄テンペラ)  
1992年～2002年(未完成)

本展では、現在、画家や修復家として活躍する「古典絵画技法研究会」(有村麻里、木島隆康、田中智恵子、十二芳明、松澤周子、初井基充、渡邊郁夫)の方々によって、技法、材料から忠実に再現した「復元模写」約30点を紹介します。ヨーロッパ古典絵画の輝きを解きあかそうとする模写作品を通して、ルネッサンス文化の深さと美しさに触れてください。

## 松本 竣介 —アトリエの時間

10月13日(土)～12月2日(日)



松本竣介《ランプ》  
1946年(個人蔵)

松本竣介の代表的な作品のひとつである《立てる像》(1942年、神奈川県立近代美術館蔵)から、最後の作品とされる《建物(青)》(1948年、当館蔵)まで約20点をご覧いただきながら、竣介がアトリエですごした時間と創作について思いをさせていただきます。同時に、麻生三郎、鶴岡政男、鬨光、難波田龍起など、アトリエを訪れ、交友した画家たち14人の作品とともにご覧いただけます。

## 松本 竣介 —読書の時間

2019年1月22日(火)～3月24日(日)



蔵書の前竣介  
アトリエにて 1940年

本展では、現在までご遺族のもとで大切に保管されてきた画家の蔵書に注目します。500冊を超える蔵書は、美術ばかりではなく、思想、哲学、文学等、多岐にわたります。松本竣介は、画家でありながら、読書家であり愛書家でした。これらの蔵書をもとに、松本竣介という画家の創作と思想の形成をたどってみます。

## 大川美術館活動の記録

2. 6 高崎市美術館「鶴岡政男」展へ  
鶴岡政男作品貸し出し
- 7 新美術新聞取材  
堀江敏幸氏 田中館長 対談
- 14 桐生法人会 賀詞交歓会  
田中館長出席 (桐生市)
- 17 講演会「花を描いた画家たち」  
講師：田中 淳(大川美術館館長)
3. 1 明照学園樹徳高等学校 卒業式  
田中館長出席 (桐生市)
- 6 桐生市立西小学校 6年生 来館
- 8 朝日新聞 取材
- 〃 「長谷川利行展」(巡回展)へ  
長谷川利行作品貸し出し
- 9 平成29年度 第5回 理事会 (当館)
- 13 桐生市立西小学校 3年生 来館
- 14 桐生市立西小学校 5年生 来館
- 15 桐生市立西小学校 4年生 来館
- 17 ミニコンサート  
ヴァイオリン：菊地 理恵
- 23 平成29年度 第1回臨時評議員会(当館)
- 29 高崎市美術館より 鶴岡政男作品返却
4. 10 「庭をながめれば」展開催 6.17まで